

～～直接会えない時代に～～

今年の母の誕生日には、兄妹3人でしっかりしたものを贈ろう、と計画していたのですが、コロナウィルスによる外出自粛というもあり、妹2人は帰ってこれずじまいでした。

私だけが代表で渡すというのも味気なく思い、SNSアプリのグループビデオ電話を使って、妹たちにはリモートで誕生祝いに参加してもらいました。

これが思ったより好評で、妹たちはその後も「リモート飲み」みたいなこともやっているとか何とか。

直接会えなくても体験を共有できる、そういう時代なんだなあと思いました。



原 光

私のつぶやき

～～夏休みの思い出～～

毎年お盆の時期になると、家族で実家に帰省しておりましたが、今年はどこも行けず、ステイホームでした。

何をしようかと悩んだ結果、ふと自家製の調味料を作ろうと思い、ネットで検索をしていると、【宇佐美本店厳選の材料で仕込む『ポン酢しょうゆ手作りセット』という、面白そうな物を見つけてしまい、購入しました。思いのほか、簡単に、おいしく作れ、家族にも好評でした。他にも新しい自家製調味料を作成してみようと思った、連休でした。



室田 直樹

10～12月の税務・お知らせ

- ・10月・・・社会保険(厚生年金)料率の変更
- ・11月・・・所得税 第2期分予定納税額の納付
- ・12月・・・給与所得の年末調整



お休みカレンダー

2020年 10月							2020年 11月							2020年 12月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	1	2	3	4	5	6	7			1	2	3	4	5
4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14	6	7	8	9	10	11	12
11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19
18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26
25	26	27	28	29	30	31	29	30						27	28	29	30	31		

わたしたちは、たくさんの“ありがとう”を集め、日本の中小企業を元気にします！

※ 過去のニュースレター「かけはし」は、弊社ホームページからご覧頂けます。

かけはし

Vol. 46

2020年10月



夏が終わったと思ったら
一気に冷えてきました・・・
皆様もご自愛ください(*_*)



ビジネスプラン / あんの会計

〒698-0041 島根県益田市高津一丁目1番1号
TEL(0856)23-6116 FAX(0856)23-6674
E-mail bplan@sx.miracle.ne.jp
HP <http://annokaikei.com>

こんにちは、安野広明です。
いつもニュースレター「かけはし」をお受け取りいただき、ありがとうございます。

今年は新型コロナウイルスに翻弄され、あっという間に1年が終わろうとしている、そんな感覚の方が多いのではないでしょうか。
弊社でも、経営計画発表会だけは、参加人数を限定し、十分なソーシャルディスタンスと感染予防を行った上でなんとか開催したものの、毎年9月に開催しているビジネスプラン特別講演会や、お正月のコメディ・クラウン・サーカスといった大きなイベントを中止にせざるを得ず、私自身、不完全燃焼のまま1年が終わる感じです。少し寂しい気もしますが、誰もが我慢を強いられている訳なので、こればかりは仕方ないのでしょう。

きっとわれわれは、歴史的な瞬間を生きているのだと思います。
話は変わりまして、この度、小冊子『桃栗経営のすすめ③』を制作し、同封させていただきました。平成26年と28年に制作した小冊子の続編（3作目）になります。私自身、いまだ学びの途上であるだけにおこがましい気もするのですが、日々試行錯誤する中で得た私なりの考えが、読まれた皆様のお役に立てばと思い、お届けした次第です。このニュースレターに掲載した過去の記事も含まれておりますので、よろしければお目通し下さい。
それでは今月号も、よろしくお願いいたします！



代表取締役
安野 広明

「リーダーシップの本質は“力”ではなく、“言葉”と“態度”」

「リーダーシップ」といった時に多くの人がイメージするのは、リーダーとして自信に溢れ、力を有し、指示を出せば部下が従ってくれる、そんな感じではないかと思います。ただ実は、これは、リーダー側の一面的な捉え方に過ぎません。
当然ながら、リーダーシップは、リーダーと部下との人間関係の中で成立します。そして両者は、社内での役割が異なるだけ。本来、1人の人間として、お互いに尊重しなければならないはずです。

にもかかわらず、リーダーが部下を「力」だけで動かそうとすれば、表面的には「リーダーシップ」がとれているように見えても、それはもしかすると、部下が立場的に何も言えず、不平・不満をため込んでいるだけかもしれません。まさに、見せかけのリーダーシップ、自己満足のリーダーシップです。
したがって、大切なのは、「言葉」によって協力関係を築くことだと思います。ろくな会話も無しに、人間関係をよくすることなんてできませんので。ちなみに、ここでいう「言葉」には、例えば、「ありがとう」とか「助かったよ」などといった、ちょっとした声掛けも含まれます。これなら、忙しいリーダーにもできるはずです。

あと、何事も真剣に取り組まなければなりません、「真剣」であることと「深刻」であることとは別で、「失敗したら叱られる」といった張り詰めた空気の中では、部下は委縮し、やがて上司の顔色をうかがうようになり、本来持っている能力を発揮できません。強い立場にあるリーダーが、深刻だったり、不機嫌になってしまうと、部下はどうしようもないのです。
もちろん、社内の雰囲気も悪化し、とりわけ、若い世代の部下は、「こんなところで何十年も勤めたくない」と、早々に見切りをつけて去っていくでしょう。
したがって、リーダーには、自分で自分の機嫌をとるスキルも不可欠だと思っています。別に、いつもニコニコしている必要はありませんが、真剣ではあっても深刻にはならず、自分の感情をコントロールしながら、上記のような「言葉」と「態度」によって、部下とのコミュニケーションを図るのです。

ここで書いたことは、時代が変わったからリーダーシップのあり方が変わったというよりも、「本来的にそうであって、一方的な指示命令（＝力）によって部下を動かすのがリーダーといった昔の価値観が間違っていた」と考えるべきでしょう。（少なくとも私はそう信じています）
すべては人間関係の中で成り立つことであり、その前提として、お互いの尊重が無ければ、組織は成り立ちませんので・・・

第36期経営計画発表会を開催いたしました。

去る10月2日、サンパレス益田にて、ビジネスプランの経営計画発表会を開催いたしました。今年にはソーシャルディスタンスの十分な確保や、来場時の検温、手指消毒など、感染防止対策をしっかりとした上での開催となり、20名以上の方がご参加くださいました。
株式会社 石見銀山 群言堂グループの松場大吉会長に基調講演をしていただいた後、弊社代表の安野が36期の方針や社員への想いを熱く語りました。



松場大吉会長の基調講演



36期も社員一丸となって頑張ります！



安野による経営計画発表



石川による社員代表挨拶

本の紹介



『幸せな人生を歩むための8つの法則』

著者：田中真澄

私は、田中真澄先生の講演を今まで2回聴かせていただきました。
とてもパワーがあり、聴くと元気になります。
現在84歳の先生が、今まで実際に経験されてきた

中で、幸せな人生を歩むための秘訣が書かれています。
先生の言葉を再確認できますし、先生がご家族をとっても大切にされていることがよくわかります。自分自身を磨き続けることが大切だ、と感じました。



中島 大吾

「人を育てるとは、人を“信頼”すること」



「信用」と「信頼」、両者は似て非なるものです。

ある本によると、「信用」とは、裏付けとなる担保と引き替えに相手を信じることとありました。確かに、「信用取引」や「信用調査」などは、「裏付け」をベースにしていますよね。逆に言えば、裏付けがなければ相手を信じないということになります。

では、「信頼」とは何か？それは、裏付けがあろうがなかろうが相手を信じること、つまり、期待を裏切られようが何をされようが、相手を信じ続けるのが「信頼」です。

したがって、ひと言に「部下を信頼している」と言っても、実はそれは、並大抵の努力ではできません。何度裏切られても、信じることを諦めないという意味ですので・・・。

しかし本来、この「信頼」がベースになれば、部下育成はできません。会社としても、「信用」(＝裏付け)だけで成り立っている組織は、もろいのではないかと思います。とりわけ、トップが社員を「信頼」できなければ、社内がギクシャクした雰囲気になるでしょう。だからこそ、上の立場になればなるほど、やせ我慢が求められるのです。

教育学者の森信三先生は、「教育とは、流れる水に文字を書くようなはかない仕事です。しかし、それをあたかも岸壁にノミで刻みつけるほどの真剣さで取り組まなければなりません」とおっしゃっています。

人を育てるとは、人を「信頼」することであると、肝に銘じたいものです。・・・自戒を込めて。

「未知なる世界へ飛び出し、“後戻りできない成長”を」



映画『スタンド・バイ・ミー』をご存知でしょうか？1987年公開の名作で、オレゴン州の小さな田舎町に住む4人の少年が、とある目的のために、町から30km離れた場所まで旅に出るという、ノスタルジックな青春ストーリー。行く先々で起こるハプニングや仲間どうしのぶつかり合いが、少年を大人にしていきます。

私は、この映画を観る度に、小学生の頃、よくつるんでいた近所の友達のことを思い出し、様々な体験がフラッシュバックすると同時に、それぞれが成長し、疎遠になったことで、あの頃の友達と、あの頃のような純粋な気持ちで集まることは二度とないんだな～と、なんとも切ない気持ちになります。あと、エンディングで流れるベン・E・キングの『スタンド・バイ・ミー』は、昔から大好きな、心に染み入る名曲です。

詳細は割愛しますが、映画の中で最も印象に残っているのは、大人になった主人公が、旅から町に戻ってきた当時のことを回想して、「たった2日の旅だったが、町が小さく、違って見えた」と語るシーン。このひと言は、旅に出る前とその後で、少年たちが「後戻りできない成長」をしたことを印象付けています・・・。

少し話は変わりますが、誰にでも、未知なる世界はあると思います。例えば、子供の頃は、住んでいる学区以外は、別世界だったはず。私なんて、高津川を渡った先の地域のことを「町」と呼び、「町には何か凄いものがある」と勝手に想像していました。親に連れられてサンプラザマルシン（現在のイオン）へ買い物に出かける時には、「町に行く」と言って、ちょっとドキドキしたものです。（超ローカルネタですが 笑）

しかし、高校に入って、自転車ですぐ（町に？）通うようになり、「こんな感じか～」と知ってしまうと、もう、ドキドキは失われます。

これこそが、「後戻りできない成長」なのかもしれません。（スケールは小さいですけど・・・）

そして、大人になった今、もちろん世界は広がりましたが、それでも、まだまだ未知なる世界は存在しますし、そこに飛び込むドキドキは持っているつもりです。「世の中なんて、どうせこんなものだ」と高をくくってしまうのは、まだ早い。それだと、映画に登場する少年たちが、旅に出る前、小さな町に閉じ籠っていたのと何ら変わらないでしょう。

外に一步踏み出すことで、町が違って見える、つまり、世の中の見え方が変わるようになるのです。

コロナ禍の現在、外出しづらいし、人に会いづらいのは残念ですが、仮に、物理的な移動はできなくとも、オンラインを活用したり、本を読んだりすれば、未知なる世界と接続することはできるはず。いくつになっても、未知なる世界への興味と一步踏み出す勇気を、持ち続けたいものです。

「コロナ禍で“攀念智（はんねんち）”に囚われぬように」

以前、イエローハット創業者の鍵山秀三郎氏のご講演を拝聴した際、「攀念智（はんねんち）」という言葉を知ったことがあります。

その意味は、人を恨む、憎むという想念を持つことだそうです。

人を憎む念は、よじ登るかのようにどんどんエスカレートしていく。（*「攀念智」の「攀」は、「よじ登る」の意）そして時には、そればかりが心に引っかかって眠れなくなり、精神まで蝕まれます。

したがって、「攀念智」を持つ人は不幸に向かっていくとのことでした。

50年以上、会社のみならず、学校や地域の掃除に取組み続け、「どんな汚いものを受け入れても、きれいにして戻す」「嫌なことをズルズルと引きずるのではなく、その場に置いていく」を実践されてきた鍵山氏の言葉には、迫力があります。

当時、間近でお話を聴いたのですが、オーラが全く違いました・・。

例えば、有名人や芸能人をネットで過剰にバッシングする人などは、まさに、「攀念智」に囚われていると言えるかもしれません。自分には何の被害もないのに、一方的に相手を憎み、燃え盛っている訳です。

とりわけ、コロナ禍の現在、目に見えないウイルスとの戦い、自由に移動できない不便さ、不景気による将来の不安などによって人々のストレスが溜まり、負の感情が出やすくなっているような気がします。

もしもそのまま「攀念智」に囚われ続けられれば、不幸に向かって進んでしまうのでしょうか。

したがって、やはり、どこかで自分の負の感情に歯止めをかける必要がありますし、そのための手段が、毎日5分でも10分でも、自分自身と向き合う時間をつくることではないかと考えています。

客観的に自分を見つめ、他人に向いていたベクトルを、自分に向ける。そうすることで、「偉そうなことを言ってしまったけど、自分はできているのだろうか?」「配慮が足りなかったな・・」「自分が相手と同じ立場なら、そんなことを言われてどう思うだろうか?」「相手なりの事情や考えがあるのだろうか・・」などに気付かされるはずです。

職場でも、相手に対して感情がエスカレートしてしまうなんてことがあるかもしれません。

そんな時は、ぜひ、この「攀念智」を思い出し、自らにベクトルを向けてみてはいかがでしょうか。

<安野からのおすすめコーナー>

*このコーナーでは、私が独断と偏見により選んだ、おすすめの本や映画等を紹介いたします。何かのご参考にしていただけると幸いです！

📖 書籍「絶望の隣は希望です！」（著者 やなせたかし）

アンパンマンの生みの親、やなせ氏からのメッセージ。やなせ氏が50年前に作詞し、その後大ヒットとなった『手のひらを太陽に』をはじめ、『それいけ！アンパンマン』、『陸前高田の松の木』と、同氏が一貫して歌に託してきたメッセージは、挫けずに生き抜くことの尊さにほかなりません。アンパンマンがなぜ、世界最弱のヒーローなのか？この本を読めば、その意味も分かります。やなせ氏の波乱万丈の人生から紡いだ、生きるヒントを余すところなく伝えている一冊です。私自身、「一寸先は光」という言葉に、勇気づけられました。

🎬 映画「キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン」（監督 スティーブン・スピルバーグ 製作 2002年）

2大スター、トム・ハンクスとレオナルド・ディカプリオが共演する、実話に基づく犯罪コメディ。60年代のアメリカを舞台に、天才詐欺師・フランクとそれを追うFBI捜査官・カールとの追跡劇を描く。映画の中で何度か登場するセリフ、「2匹の小さなネズミが、クリームの入ったバケツに落ちてしまった。1匹はすぐにあきらめて、溺れ死んだ。もう1匹のネズミは、あきらめようとはしなかった。ジタバタもがいて、ついにはクリームをバターに変え、這い出てきた。私は2匹目のネズミだ。」は、私の好きなエピソードです。

🎬 映画「キッド」（監督・主演 チャールズ・チャップリン 製作 1921年）

言わずと知れた名作。チャップリンの映画は、『モダンタイムス』『黄金狂時代』『街の灯』『独裁者』など、好きな作品が多いのですが、「感動」という意味では、『キッド』が私の一押しです。映画のラスト近くで子役を抱きしめるシーンは、涙を誘います。チャップリンの第一子が制作開始の直前に亡くなっていることが、この映画での子供への親密な愛情表現につながっているという説もあるようです。あの忘れられない感動的な音楽までチャップリンが作曲しているというのだから、その多才ぶりには驚かされます。